映画・本・歴史のこと

〈第７回〉中村哲と『花と龍』

有田誠（ありたまこと）　京丹波町在住の映画愛好家。

写真は、北九州の若松と戸畑を結ぶ渡船。1972年、筆者撮影。

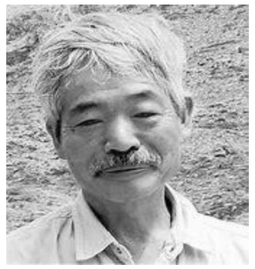
パキスタン、アフガニスタンでの医療活動に始まり、千四百本の井戸を掘り、二〇〇九年には二四・三キロの用水路を完成させる。大旱魃、飢餓、貧困に苦しむ何十万人もの人々の暮らしを可能にする事業は、今日現在も継続中である。その中村哲先生が銃弾に倒れ、四年近くが経った。

医師中村哲

人々に必要な物は水と食料。それ抜きでの医療は、根本的な解決にならないと現場で実感。アフガンの沙漠化した土地に水を引き、食糧を自給できることで衛生状態を改善する。難民化を食いとめ、故郷での家族との暮らしを成り立たせる。中村医師はその壮大なる事業を三十年以上やりつづけた。荒野が緑一面の沃地となる映像を見ると、心が最大限に揺り動かされる。

一九七九年から十年に及んだソ連の侵略、二〇〇一年からの米英による無差別爆撃で、何百万人もの人々が犠牲になってきた。英国のブレア首相は、（父）ブッシュ大統領の御座敷犬といわれた。小泉首相もプレスリーの真似などして米国に額づいて協力した。当時の国会でテロ対策特別措置法案審議で参考人に呼ばれた中村先生は、「日本の軍事協力は百害あって一利なし」と訴えた。それに対し亀井善之議員（自民）らから非難、嘲笑、野次が出たことは忘れられない。二度目の二〇〇八年の外交防衛委員会でも、佐藤正久議員（自民）、浜田昌良（公明）議員から攻撃を受けた。

アフガンの救援活動は、福岡市にあるペシャワール会によって寄付と会費で営まれている。



中村哲（1946～2019）

映画『花と龍』

中村哲（以下敬称略）の父、中村勉（つとむ）の妻秀子の兄が玉井勝則、ペンネームが火野葦平で、中村哲の伯父にあたる。その代表作の一つが『花と龍』（岩波現代文庫上下巻）、七回映画化されている。

北九州の若松で、石炭の沖仲仕（ゴンゾ）をやってきた中村哲の祖父玉井金五郎と祖母マンの一代記である。

映画では金五郎を中村錦之助、石原裕次郎、高倉健、渡哲也などが演じている。マンは浅丘ルリ子、佐久間良子、星由里子、中村玉緒らが演じた。主要登場人物の数は多いが、金五郎に想いを寄せ、菊の花をつかんだ龍の刺青を彫るお京は、淡路恵子、藤純子、倍賞美津子らの役どころである。

話は日露戦争の頃から昭和へと至る。中村哲は、本人も言うように、祖父金五郎に風貌も性格も似ている。ペシャワール会が一九八三年に発足したとき、中村哲が金五郎と似ているから寄附をするというひともいたらしい。

個人的には、やはり健さんの『日本侠客伝　花と龍』（マキノ雅弘監督一九六九年）が好きである。この作品は、日活から二谷英明、東宝から星由里子が客演している。いずれも好演である。

加藤泰監督版（一九七三年）は、学生のとき、東京から若松まで出かけ、現地で観た。これも好きである。

玉井金五郎は、もとよりやくざではない。石原裕次郎版では、減多切りにされても、相手の集団を傷つけない。しかし、高倉健版は、日本侠客伝シリーズの中の二本であり、『昇り龍』（山下耕作監督一九七〇年）では、健さんはきっちり天津敏演じる敵の友田を叩っ切る。おまけに、お京の悲恋物語に主軸が置かれ、藤純子はほとんど緋牡丹博徒シリーズのお竜さんだ。

玉井金五郎（1880～1950）

中村勉、哲父子

小説の第二部では作者自身、つまり玉井勝則が主要人物として登場する。

昭和に入り、石炭の荷揚げも機械化されてゆく。そこで失業するゴンゾたちが三菱に対して労働争議に入る。組合を結成し、戦う物語へと移っていく。そのなかに哲の父中村勉もいた。玉井勝則の協力を得て、若松市議選に出るが落ちる。金五郎とマンの三女秀子（勝則の妹）と駆け落ち結婚をすることになる。勉は社会主義者となり、官憲に捕まって服役したこともある。秀子もレーニンを読んでいたらしい。

しかし、中村哲は論語を幼いときから意味もわからぬまま父に読まされる。金五郎、勉の心意気がアフガニスタンにつながっているとしか思えない。

中村哲は二〇〇二年に次男の剛を病気で失った。「バカたれが。親より先に逝く不孝者があるか。見とれ、おまえの弔いは、わしが命がけでやる。あの世で待っとれ」。

まったく玉井金五郎の台詞そのものではないか。

火野葦平

火野葦平（1907～1960）

玉井一族は福岡空襲でほとんどが殺された。火野は日中戦争に材を取った兵隊三部作などを書き、フィリピン、そして古関裕而らとインパールに従軍した。そこには九州の郷土部隊「龍」と「菊」の二兵団も苦闘していた。戦後、戦争協力作家として公職追放となり、しばらく書けなかった。あの戦争に疑問を持つことなく関わった自己嫌悪で自殺を考えるが、一族を経済的に支える責任から、とにかく原稿を書きつづける。一九六〇年に自決した。

「男は度胸、女は愛嬌」（中村哲の言葉）

玉井金五郎　一九五〇年没　七〇歳

火野葦平　一九六〇年没　五三歳

中村哲　二〇一九年没　七二歳

質量のある人間たちはあちこちにいる。彼等彼女らを見習って、少しずつ背伸びすることを成長という。